



日本組織培養学会

会員通信

第124号

平成22年8月6日

発行者

* 坂野 俊宏 (株式会社マンダム)
伊藤 丈洋 (株式会社細胞科学研究所)

* 責任者連絡先

〒540-8530

大阪市中央区十二軒町5-12

株式会社マンダム 中央研究所

研究管理室

TEL : 06-6767-5024

目次

1. 第83回大会を終えて

大会世話人報告	許 南保	2
奨励賞審査結果	佐藤 元信	3
奨励賞受賞者感想文	久保 孝文	3
	Ran Gao	4
	上野 剛	4

2. 平成22年度第幹事会報告

庶務報告	鈴木 崇彦	5
会計報告	山本 直樹	5
機関誌「組織培養研究 Tissue Culture Research Communications」の発行形態に関する議論について	鈴木 崇彦	9
名誉会員の推戴	鈴木 崇彦	10
感謝状の授与	鈴木 崇彦	10

3. 各種委員会報告

教育システム委員会報告	古江-楠田 美保	10
テクニカルアーカイブ委員会報告	浅香 勲	13

第83回大会を終えて

大会世話人報告

日本組織培養学会第 83 回大会を終えて

岡山大学医歯薬総合研究科
許 南浩

第 83 回大会は 5 月 20、21 日に岡山大学創立 50 周年記念館で行われ、盛会のうちに無事終了いたしました。これも関係の皆様のご献身的なご尽力あつてのことで、深く感謝いたします。

今回は「組織培養 100 年、新たなステージへ」というコンセプトの下に、培養の原点に立ち戻るワークショップ「原点から見つめ直す培養細胞研究の標準化」、新しい方向へのシンポジウム「In Vitro 組織形成への挑戦」、さらに未来の細胞学を目指す特別講演「生命システムのロバストネス」を組みました。Session in English は、若い人たちに英語で発表する練習の場を設けたいという趣旨でした。幸い、出席者からはそれぞれ非常に興味深い内容であったとの評価を頂きました。これもオーガナイザー、座長、スピーカーの先生方が素晴らし業績と見識をお持ちであるお陰でありまして、深い敬意と感謝を捧げます。また、私にとってもう一つ印象的であったのは「培養指導士養成講習会」のセッションで、鈴木会長はもとより、間中研一先生、古江楠田美保先生方のご努力がいよいよ実質化しつつあることを実感致しました。日本組織培養学会の大きな使命である若い人材の育成が着々と進みつつあることを大変頼もしく嬉しく思いました。今後とも是非この活動を続けて頂きたいと思っております。

懇親会は私が前回世話人を務めた富山での大会同様、3連鏡割りを行いました。会場が生協の経営するレストランというやや地味なところであったにも関わらず、升で日本酒が回り始めるとあつという間に雰囲気盛り上がりしました。樽の日本酒というのは不思議な力があるものだと、改めて実感した次第です。この日本酒の確保にあたっては、難波正義先生に大変お世話になりました。大会には黒木登志夫先生とその研究室に所属していた方々、高木良三郎先生をはじめ多くの旧知の先生方がおいで下さいました。このことは私にとって何よりも大きな励ましとなりました。

大会の運営面では培養学会の間中先生、山本先生に大変なご助力を頂きました。また内輪のことではありますが、大会を運営の実質的な責任者を務めてくれた片岡健助教をはじめとする教室員の皆様にも深く感謝いたします。

また来年、絵野沢先生の主催する東京の大会で多くの会員の皆様とお会いできることを楽しみにしております。

日本組織培養学会奨励賞審査結果

日本組織培養学会奨励賞は、将来性ある若手研究者の研究を奨励し、本学会の活性化を図る目的で設立されたものです。平成 22 年度の奨励賞対象演題は第 83 回学術大会にて口頭ならびにポスターにて発表され、審査員により公平に審査・採点されました。

発表演題は 3 題で、「悪性胸膜中皮腫の新しい分子生物学異常と治療応用の可能性」を発表された、岡山大学大学院 医歯薬学総合研究科 腫瘍・胸部外科の久保 孝文 さん、「培養がん細胞内のモーター分布パターンをもとに同定された抗がん遺伝子標的」を発表された、筑波大学大学院 生命環境科学研究科のガオ ラン さん、「EGFR チロシンキナーゼ阻害剤に対する耐性株の樹立と分子生物学的特徴の検討」を発表された、岡山大学大学院 医歯薬学総合研究科 腫瘍・胸部外科の上野 剛 さんの 3 名全員が基準を満たしておりましたので受賞者に選出されました。受賞者には学術大会 2 日目に開催された平成 22 年度日本組織培養学会総会において、賞状ならびに副賞が鈴木会長より授与されました。奇しくも 3 演題いずれも、がんの抑制、診断、治療の鍵となる発表内容であり、細胞培養・操作技術を駆使してすばらしい成果をあげられました。

各受賞者におかれましては、この度の受賞を契機に今後後進への範となるようさらに研鑽をつまれ、本学会におけるさらなるご活躍を期待したいと思います。

(文責：佐藤 元信)

第83回日本組織培養学会 奨励賞受賞の感想文

岡山大学大学院医歯薬総合研究科 腫瘍・胸部外科 久保孝文

この度は第83回日本組織培養学会奨励賞を受賞させていただき本当にありがとうございました。また翌日の授賞式には参加することができず本当に申し訳ございませんでした。

発表内容に関しましては、難治性疾患である悪性胸膜中皮腫(MPM)における MicroRNA(miR)-34b/c のメチル化による発現低下と、miR-34b/c の MPM 細胞株への導入による腫瘍抑制効果について検討したものです。結果は MPM では細胞株、臨床検体ともに miR-34b/c は高率にメチル化し、発現量も低下していました。また miR-34b/c のプラスミドベクターを用いた導入により細胞周期は G1 arrest に傾き、コロニー形成能、移動、浸潤能が有意に低下しました。

MPM では他の固形癌とは異なり、p53 遺伝子変異が少ないことは以前から知られていますが、その他の分子学的特徴の多くは不明であるのが現状です。興味深いことに miR-34b/c は p53 が transcriptional factor であり、miR-34b/c のメチル化による silencing は p53 遺伝子変異に関係しない(特に p53 遺伝子が野生型の悪性疾患において)p53 の腫瘍抑制機構の破綻に重要な役割を果たしているのではないかと考えられます。特に微量な臨床検体から miR-34b/c のメチル化を量的に測定することで、病理学的に鑑別が困難とされる段階の MPM の

診断の一助になればと我々も期待を寄せています。さらに体外からの miR-34b/c の導入が、現在早期発見での胸膜肺全摘術しか根治治療が望めない MPM の新たな治療法に繋がれば幸いです。

この度はやや扱いにくいとされる MPM 細胞株を培養し、プラスミドベクター等の導入による細胞の性質変化等を観察することで細胞培養の観点からも大変勉強になりました。今回学んだことをこれからの研究生活に生かし日々精進していく所存です。ご指導いただきました先生方、またこのような発表の機会を与えてくださり学会運営等でお世話になりました先生方にも厚く御礼申し上げます。この度は本当にありがとうございました。

筑波大学大学院 生命環境科学研究科・産業技術総合研究所 セルエンジニアリング研究部門

ガオ ラン (Ran Gao)

I am honored to receive the “Young Investigator’s Award”. I am very thankful to the selection committee for this honor. This award is a great encouragement for me to work even harder and contribute to frontiers of knowledge in the tissue culture field. I am determined to contribute to the cancer biology and therapeutics and believe that the tissue culture techniques have lots to offer in this field. My laboratory headed by Drs Renu Wadhwa and Sunil Kaul has been using tissue culture technologies and have made several original findings in cancer, aging and stress molecular biology. I certainly feel fortunate as being a member of their team and have achieved great motivation and momentum for my own research career. Participation in the 83rd Annual Meeting of Japan Tissue Culture Association was a great learning experience. It was very interactive and a good opportunity for me to make friends in research and hope to carry it on in my future.

I would also like to take this opportunity to extend my gratitude to the organizers and sponsors of the “83rd Annual Meeting of Japan Tissue Culture Association”, whose efforts made the meeting a very successful activity. I very much look forward to attend the next year’s meeting as well.

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 腫瘍・胸部外科 上野 剛

由緒ある学会で、このような賞を頂きまして、ありがとうございました。基礎研究を始め、一年程しか経っておりませんが、賞を頂けたことはこれからの研究生活を送るうえで、大変励みになりました。

臨床の場で外科医として、8年間癌治療に携わってきました。手術、薬物治療、放射線治療が効き、笑顔で退院される患者様おられる一方で、再発や転移を発症し、場合によってはなす術がなく、悔しい思いを経験することもありました。その中でも、肺癌は悪性度、進行度が高い癌で、手術だけで完治する症例は限られており、薬物療法に頼るところが、非常に大きい癌です。薬物治療の進歩していく中で、近年分子標的薬剤である EGFR-TKI(Epidermal Growth Factor Receptor-)は EGFR 変異症例に対し、劇的な効果を奏することが分かってきました。しかし、抗癌剤と同様に薬剤耐性化が問題となってきています。現在、耐性化の原因として、exon20 の T790M 遺伝子の 2 次的遺伝子変異、MET 遺伝子の増幅、PTEN 遺伝子の欠損などが報告されていますが、未だ解明されていないものも多く、さらなる原因の追及が必要とされています。

私は EGFR 遺伝子変異肺癌細胞株(PC9, HCC827)を使用し、EGFR-TKI 耐性株を樹立しました。樹立した耐

性株では現報告されている 2 次的遺伝子変異や耐性化に関わる遺伝子増幅は認めませんでした。蛋白の発現では耐性株で AKT のリン酸化の発現の上昇を認めました。現在、耐性化の機序に関与しているかどうか検討中であります。

今後、さらに研究を進め、耐性化の機序解明を追及すると共に、肺癌を始めとした癌の発生機序、再発、転移のしくみについても日々勉強していきたいと思っております。今後とも御指導、御鞭撻の程よろしく申し上げます。

2. 平成 22 年度幹事会報告

庶務報告

会員数(平成 22 年 5 月 1 日現在)

	件数		件数
正会員	469	退会・逝去	746
学生会員	65	休会	5
賛助会員	22		
名誉会員	20		
寄贈会員	1		
小計	577	小計	751
総計			1328

会計報告

1)平成 21 年度決算報告

平成 21 年度決算書

(平成 21 年 4 月 1 日～平成 22 年 3 月 31 日)

一般会計

【収入の部】

勘定科目	平成 21 年度予算額	平成 21 年度決算額	備考
前年度繰越金	400,897	400,897	
正会員会費	1,600,000	1,314,000	194 名
学生会員会費	100,000	96,000	30 名
賛助会員会費	450,000	510,000	12 社
入会金	50,000	46,000	
機関誌関連収入	550,000	336,453	購読料, 別刷代等

雑収入	10,000	71	普通預金利息等
単年度収入合計…①	2,760,000	2,302,524	
収入合計…②	3,160,897	2,703,421	(単位:円)

【支出の部】

勘定科目	平成 21 年度予算額	平成 21 年度決算額	備 考
機関誌発行費	1,600,000	1,060,500	28 巻 1 号, 2・3・4 号
会員通信発行費	100,000	79,380	122 号, 123 号
学会業務委託費	1,100,000	856,273	郵送費, 管理費, 会費請求, J-STAGE アップロード費等
引当金(1回目)	200,000	200,000	会員名簿作成費積立
雑費	50,000	840	振込み手数料等
単年度支出合計…③	3,050,000	2,196,993	
単年度収支(=①-③)	△290,000	105,531	
次年度繰越金…④(=②-③)	110,897	506,428	
合計(③+④=②)	3,160,897	2,703,421	(単位:円)

特別会計

【収入の部】

勘定科目	平成 21 年度予算額	平成 21 年度決算額	備 考
前年度繰越金	7,457,376	7,457,376	
寄付金収入	100,000	30,000	学会協賛金
出版収入	180,000	119,808	機関誌以外の出版物* 収益
講習会テキスト販売収益	100,000	111,000	販売数 37 冊
第 82 回大会収益	0	600,000	第 82 回大会収益
雑収入	8,000	1,195	普通預金利息等
単年度収入合計…①	388,000	862,003	
収入合計…②	7,845,376	8,319,379	(単位:円)

* 「細胞培養なるほど Q&A」収益寄付(編集者 許南浩 会員より)

【支出の部】

勘定科目	平成 21 年度予算額	平成 21 年度決算額	備 考
第 83 回大会補助金	600,000	600,000	
学会奨励賞	300,000	250,000	奨励賞受賞者 4 名
功労賞関連経費	200,000	0	

研究教育システム委員会	300,000	48,559	
テクニカルアーカイブ委員会	300,000	3,890	
情報技術利用委員会	100,000	0	
サーバー購入費	250,000	0	
幹事会議費	300,000	279,800	幹事会交通費, 会議室利用料等
雑費	30,000	13,625	振込み手数料等
単年度支出合計…③	2,380,000	1,195,874	
単年度収支(=①-③)	△1,992,000	△333,871	
次年度繰越金…④(=②-③)	5,465,376	7,123,505	
合計(③+④=②)	7,845,376	8,319,379	(単位:円)

日本組織培養学会の平成21年度決算書類は、DSファーマバイオメディカル株式会社 上田忠佳会員と岡山大学大学院医歯薬学総合研究科細胞生物学分野 片岡健会員に監査をお願いし、厳正な監査の結果、会計は適正に処理されていることが確認されました。

また、本決算書は第83回大会総会において承認されました。

平成22年度予算案

(平成22年4月1日～平成23年3月31日)

一般会計

【収入の部】

勘定科目	平成22年度予算額	備考
前年度繰越金	506,428	
正会員会費	1,500,000	
学生会員会費	100,000	
賛助会員会費	500,000	
入会金	50,000	
機関誌関連収入	200,000	購読料, 別刷代等
講習会テキスト販売収益	100,000	
雑収入	100	普通預金利息等
単年度収入合計…①	2,450,100	
収入合計…②	2,956,528	(単位:円)

【支出の部】

勘定科目	平成22年度予算額	備考
------	-----------	----

機関誌発行費	1,200,000	29 巻
会員通信発行費	40,000	
学会業務委託費	800,000	郵送費, 管理費, 会費請求, J-STAGE アップロード費等
引当金(2回目)	200,000	会員名簿作成費積立
第 84 回大会補助金	600,000	
研究教育システム委員会	300,000	
テクニカルアーカイブ委員会	300,000	
幹事会議費	150,000	
雑費	30,000	振込み手数料等
単年度支出合計…③	3,620,000	
単年度収支(=①-③)	△1,169,900	
次年度繰越金…④(=②-③)	△663,472	
合計(③+④=②)	2,956,528	(単位:円)

特別会計

【収入の部】

勘定科目	平成 22 年度予算額	備 考
前年度繰越金	7,123,505	
寄付金収入	100,000	機関誌以外の出版物収益寄付等
雑収入	1,000	普通預金利息等
単年度収入合計…①	101,000	
収入合計…②	7,224,505	(単位:円)

【支出の部】

勘定科目	平成 22 年度予算額	備 考
学会奨励賞	300,000	
功労賞関連経費	100,000	
名誉会員推戴費	40,000	記念盾
雑費	5,000	振込み手数料等
単年度支出合計…③	445,000	
単年度収支(=①-③)	△344,000	
次年度繰越金…④(=②-③)	6,779,505	
合計(③+④=②)	7,224,505	(単位:円)

(文責: 山本 直樹)

(平成 22 年度予算案について)

当学会では、以前から会計を一般会計と特別会計に分けて執行してきました。特別会計は故山根名誉会員が国際学会を開催したときの余剰金を若手会員の奨励に使用して欲しいとの意向で学会が寄付を受けたのが始まりで、その後、蔵本名誉会員から同様に国際学会開催の余剰金の寄付を受けるなどして集まった資金をもとに成立したもので、奨励賞の他、将来の学会資産となるような委員会活動費などに充てられてきました。また、一時的な収入や一時的な支出など、年度予算の執行計画から外れるような学会活動費の出納の受け皿としても機能してきました。

一方で、特別会計があるために学会活動費の単年度収支バランスが見えにくくなっているということもあります。これまで、特別会計に数百万円の資金があるために、毎年繰越金が生じていたことから、会計に対する危機感が薄れていることも否めません。しかし、着実に学会の資金は減り続けています。

そこで、平成 22 年度予算案では、特別会計を本来の奨励基金に伴う支出、および寄附金の受け皿のみに限定し、その他全ての学会活動費を一般会計にすることにしました。現在の全ての学会活動を一般会計で処理しようとすると、予算案のごとく、単年度で 100 万円を越える赤字を計上することになります。しかし、このようにすることで、会計のどこに問題がありそうか、どこかの改善が必要か、ということが見えてきます。会員からの会費の納入率の向上を図ることをはじめ、賛助会員の掘り起こし、学会業務委託費の効率化など、執行役員が取り組む課題が見えてきています。

以上のことを幹事会および総会において説明し、両会において承認いただいた予算案が以下の通りです。

会員通信の紙面をお借りして例年に無い長々とした予算案の説明を致しましたが、会員の皆様にはどうぞ主旨をご理解いただき、会費納入、賛助会員の掘り起こしなどについて何とぞご支援賜りますよう心よりお願い申し上げます。

(文責：鈴木 崇彦)

機関誌「組織培養研究 Tissue Culture Research Communications」の発行形態に関する議論について

予算書をご覧いただければ分かる通り、機関誌の編集・発行事業は学会活動費の中でも大きなウェイトを占めています。年4回の季刊発行を目指していますが、これを実現すると学会にとってかなりの費用負担となることから、編集委員長を中心に幹事会の中で機関誌の発行形態、すなわちオンラインペーパー化の可能性などについて話し合っています。年度機関誌の第1号は大会要旨集に当てられていることから、最低でも年1回の印刷物の発行は必須であることから、投稿論文はオンラインで公表し、それを第1号にまとめた形での印刷ものにする、という案が提案されていますが、今後も検討を続け、来年の総会までには結論をまとめたいと考えています。

(文責：鈴木 崇彦)

名誉会員の推戴

本年度は、以下の 3 名の会員を名誉会員に推戴することを幹事会において決定し、総会において名誉会員

の推戴式を挙行政致しました。(50音順)

大野 忠夫 先生 (セルメディシン代表取締役)

松村 外志張 先生 (横浜バイオリサーチアンドサプライ取締役)

三井 洋司 先生 (徳島文理大薬学部教授)

(文責: 鈴木 崇彦)

感謝状の授与

当学会ホームページ上に開設している「(新)組織培養質問箱」の管理運営、ならびに回答において多大の功績を果たされている下記の2名の会員に感謝状ならびに金一封を授与することを幹事会で決定し、総会において授与式を行いました。「(新)組織培養質問箱」は、日本組織培養学会で長年培われた知恵を若手研究者の育成に活用しようという趣旨で全ての人に開かれた画期的なもので、2004年の開設以来、これまでに13万件を超えるアクセスを得るに至っており、社会に開かれた当学会活動の象徴ともいえるべきものです。

間中 研一 先生 (獨協医科大学)

佐藤 元信 先生 (ヒューマンサイエンス振興財団)

(文責: 鈴木 崇彦)

3. 委員会活動報告

研究教育システム委員会 報告

研究教育システム委員会では、昨年度に、「細胞の品質管理と細胞を用いたアッセイ」についての実習コースIIを立ち上げ、第1回を独立行政法人・医薬基盤研究所(NIBIO)にて、平成22年1月30,31日に開催いたしました。7名の会員を対象として、委員長・古江(NIBIO)、上田(大日本住友製薬グループ)、坂野(マンダム)、小原(NIBIO)、佐藤(ヒューマンサイエンス財団)、藤井(愛知県がんセンター)の5名の会員が指導を担当しました。実習を受けられた会員の中には、コースIでの実習が実践に役立てられていると感じる方もおり、企画者としては喜ぶこともありましたが、コースIへのフィードバックを考えるべき事例などもあり、反省点も多く、改善を含めて、現在、細胞培養士認定コースを構想中です。岡山で開催されました第83回大会のワークショップで、その全体案について説明をしました。下記に、その内容を記載いたします。今年度中に、コースIIIの企画を提案したいと考えております。ご意見、アドバイス、ご提案がございましたら、委員長の古江まで、ご連絡いただけますようお願いいたします。

また、ようやく細胞培養実習コースの全体像を考えるとところまでたどり着きました。培養技術の標準化とその普及には、培養の基盤技術に対する考え方の連携と共通認識が必須であると感じております。培養実習を行うとともに、培養経験の豊富な会員の方々には、実習での指導にご参加をお願いしたいと思います。是非とも、ご協力いただきますよう、よろしくお願いいたします。

【細胞培養士認定コース 全体案】

【目的】深刻なクロスコンタミネーションやマイコプラズマ感染などが報告されている一方、再生医療や薬剤毒性評価に培養細胞の利用が注目されている。安全、高品質で汎用性のある培養細胞を使用して、科学的に安定した結果が産生されるために、培養技術を標準化していくことを目的とする。その一環として、培養実習を行い、細胞培養士を育成する。

講習はコース0～3を基本コースとし、コース3終了後に、細胞培養士と認定する。

コース名

コース0 2011年度 第1回開催予定

コース1 開催中

コース2 2009年度 第1回開催

コース3 2011年度 第1回開催予定

【コース0】

各種実験で求められるグレードの実験室をメイキングし、維持できる。

必要となるハード・ソフトの理解をする。

〔認定資格〕: 培養学会会員

(ただし、入会と同時に受講できる。培養経験がない会員を対象)

〔学習目標〕

1. 求められる段階的なグレードを知る
2. 無菌環境の必要性を学ぶ
3. 基本的な実験機器・器具の理解と校正・メンテナンス実施の必要性を理解できる
4. 試薬、培地類の調製と管理の方法を学ぶ

〔到達目標〕

1. ピペットの操作方法を理解する
2. クリーベンチの仕組みを理解する

〔インストラクター資格〕

〔本拠地〕大会時ポスター会場（企業に協力を求める）

コースI開催当日 朝 1時間

〔サテライト開催地〕

本拠地開催ベーシックコースにおいてインストラクターを2回以上経験したことがあるインストラクター2名以上が参加して、各研究室において、4名以下の培養学会員を指導するベーシックコース。

【コース1】

細胞培養の基本を理解し、細胞株を適切な方法で培養できる。

〔認定資格〕: 培養学会会員

(ただし、入会と同時に受講できる。培養にかかる操作を経験したことがある会員)

〔学習目標〕

1. 無菌操作を理解できる。
2. 細胞を観察する。
3. 細胞を解凍する。
4. 細胞を凍結する。
5. 培地交換を行う。

6. 継代する。
7. 細胞数をカウントする。

〔到達目標〕

1. 無菌操作を無理なくできる。
2. 細胞が増殖していることを認識できる。
3. 凍結細胞を安全に解凍できる。
4. 細胞を凍結する方法を理解する。
5. 細胞を傷つけないように培地交換ができる。
6. 細胞分散の状態を把握して、継代ができる。
7. 継代時の細胞数をカウントできる。

〔評価〕

評価基準 A:介助なしに行える B:少しの介助で行える C:介助なしには困難

〔フィードバック〕

指導者からの評価と指導点を通達。

〔指導者資格〕

総会にて開催する細胞培養指導者講習会 3年に1回参加し、本拠地開催ベーシックコースにおいて指導者とともに実習指導を3回以上経験し、本実習の意義を理解して細胞培養士育成に貢献したいと希望する培養学会会員。インストラクター認定書を教育システム委員会から送付する。

〔本拠地〕

広島大学医歯薬総合大学院
獨協医科大学 研究支援センター（栃木県）

〔サテライト開催地〕

本拠地開催ベーシックコースにおいてインストラクターを4回以上経験したことがあるインストラクター2名以上が参加して、各研究室において、4名以下の培養学会員を指導するベーシックコース。教育システム委員会から座学の講師を派遣する。

サテライト開催は、申請書を教育システム委員会に提出、検討、幹事会へ推薦、承認。

【コース2】

培養細胞の品質管理法を理解し、細胞を用いたアッセイが行える。

〔認定資格〕: ベーシックコース1修了者で、コースIにおける7項目がA(介助なしに行える)と自己評価できた会員

〔学習目標〕

1. マイコプラズマ感染の確認方法を理解する。
2. クロスコンタミネーションの発生原因を理解する。
3. 細胞の機能評価を行う。
4. 細胞を用いた毒性評価を行う。
5. 染色体を観察する。

〔到達目標〕

1. マイコプラズマ感染の確認方法を理解し、感染の対処方法を知る。
2. クロスコンタミの確認の方法を理解し、クロスコンタミが発生しないような実験操作を行うことができる。
3. 細胞がその機能を保つような培養を行うことができ、その評価を行うことができる。
4. 薬剤に対する細胞数に与える影響を解析できる。
5. ヒト培養細胞の染色体を観察できる。

[評価]実習終了直後、講師間での意見交換を行い、評価、総評する。
[フィードバック]総評を傳達する。

[指導者資格]

総会にて開催する細胞培養指導者講習会に2年に1度以上参加し、本拠地開催ベーシックコースにおいてアシスタントとして参加を3回以上行った培養学会会員

[本拠地]

独立行政法人・医薬基盤研究所

来年度は、別途計画中

[サテライト開催地]

本拠地開催ベーシックコースにおいてインストラクターを4回以上経験したことがあるインストラクター2名以上が参加して、各研究室において、4名以下の培養学会員を指導するベーシックコース。座学は、委員会から講師派遣

サテライト開催は、申請書を教育システム委員会に提出、検討、幹事会へ推薦、承認。

【コース3】平成22年度中に企画提案を予定。

古江一楠田美保

〒567-0085 大阪府茨木市彩都あさぎ 7-6-8

Tel: 072-641-9819 Fax: 072-641-9851 Email: mkfurue@nibio.go.jp

(文責: 古江-楠田 美保)

テクニカルアーカイブ委員会 報告

当委員会は2009年の第82回大会総会において設立が承認され、初代の委員として許南浩先生(岡山大)、間中研一先生(独協医大)、中村幸夫先生(理研 BRC)、古江-楠田美保先生(医薬基盤研)、佐藤元信先生(HS 財団)の諸先生に委嘱させていただきました。

2009年度の活動といたしましては、委員連絡用のメーリングリストを作成した後、3月6日大阪の千里ライフサイエンスセンターにて第1回の委員会を開催いたしました。討議内容については下記の通りです。

記

(1) アーカイブ収載項目の策定.

- ・ 技術(テクニカルコンテンツ)の蓄積を基本とする.
- ・ 「組織培養の技術:応用編」や「機能細胞の分離と培養」等のマニュアルより収載項目の候補を洗い出す.
- ・ 既に保有している有形資産のリストアップ(高岡先生のビデオ等)を行う.
- ・ 蓄積は HD かブルーレイディスクで保管.

- ・ 今後メーリングリストでさらに内容を出し合う。
* 掲載項目策定の考え方: プライマリーカルチャーのシナリオ(組織培養の技術の応用編等)を再現してビデオに収録.

ex. 骨髄細胞の分離, 唾液腺細胞の分離, etc

(2) 動画収集時の確認事項の検討

- ・ 秘密保持契約等の要否: 学会名で秘密保持契約を締結.
- ・ アーカイブの著作権 : 学会が著作を保有する.

(3) アーカイブ利用法の検討

- ・ アーカイブを利用した出版活動の在り方を今後検討する.

(4) 委員会活動年次計画

2009 年度: 初回会合, コンテンツの決定

2010 年度: 撮影と蓄積

2011 年度: 編集等

2012 年度: 公開

以上

(文責: 浅香 勲)

【編集後記】

会員通信第 124 号をお届けいたします。大会報告号ということで、迅速な発行を目指そうと意気込んでおりましたが、猛暑の勢いに押され8月の発行となりました。なにぶんにも炎暑酷暑のみぎり、会員皆様のご健勝とご自愛をお祈り申し上げます(ti)。